

# 大震災から5年を経て 改めて思うこと



廣瀬 典昭

土木学会 第103代会長

## 道半ばの復興事業

東日本大震災が発生し今春で丸5年が経過しましたが、いまだ約17万人の方々が郷里を離れて避難生活を余儀なくされています。土木学会は3月に「この5年間を復興の加速と次への備えに活かすために」と題した東日本大震災5周年シンポジウムを東京で開催しました。これまでの復興事業の報告を踏まえ、被災地域における新たな国土形成の方向性と、その実現に必要な技術や技術者の姿勢について、改めて考える場となりました。復興は一部を除いてまだ道半ばであり、特に、福島第一原発事故の影響を被った地域では、復旧活動すら未着手なところが多く残されています。このようないまだに災害が進行中である被災地と被災者に対して何ができるかを、私たちは考え続けていく必要がある

## 土木技術者としての反省

ことを強く認識しました。私たちは、この地震による巨大な津波の発生を目の当たりにし、きわめて稀にしか起こらないと思われる大自然の驚異が現に起こっているのだということを痛感しました。また、被災の全貌が明らかになるにつれ、被害を防止する、あるいは最小限に食い止めるという点で、土木技術者が他の専門家や関係者と協働して、その意を十分に尽くしていたであろうかという反省も生まれました。国民の命と安全を守る社会資本整備に携わる者として、起こりうる現象のすべてを想定した上で、工学的、社会科学的な観点から実現可能な方策を立案し、実践してきたのか、社会的合意を得るうえで技術者としての基本的姿勢に妥協がなかったかということなどを、東



千年希望の丘 (宮城県岩沼市) (写真提供: 岩沼市)

日本大震災によって私たちは問いかけられたように思います。

### 土木技術者の原点

土木学会は創立100周年を機に倫理規定を改定し、新しい規定を公表しました。今春、その実践の手引書として『土木技術者の倫理を考える 3・11と土木の原点への回帰』を発刊しました。副題にも示されているように、今回の改定は、東日本大震災から学んだ、土木技術者としての倫理的な反省とそれに基づく考察が大きな動機となっています。土木技術者には、自分だけの領域にとらわれることなく思考の範囲を広げ、科学技術の限界を知りつつ、多様な人たちの力を結集して最善策を考え、実現させていくという使命があります。衆知を集めてより良いものをつくり出すことが土木技術者の原点であることを本書は指摘

しています。

### 連携とリーダーシップ

土木技術者が携わる現実社会で生じるさまざまな問題や課題を解決するためには、多様な専門家や関係者、市民らとの協働が不可欠です。その際に土木技術者は、細分化された工学分野の一専門家として参加するだけではなく、多様な関係者との連携を図らなくてはなりません。特に、大規模な自然災害のように、社会的影響が大きく、科学技術と社会科学が連携して対処すべき場合においては、土木技術者には全体をまとめ上げるリーダーシップが強く求められるところです。次代を担う若い土木技術者の皆様が、そのような信念と倫理観に裏打ちされた志をしっかりと心に刻んで活躍していただくことを切に期待する次第です。